

【五月の言葉（令和八年）】

仏さまの前では みんな平等

せんじゆ
「専修念仏のともがらの、わが弟子ひとの弟子、という相論の、そろそろらんこと、もつてのほかの子細なり。」

（歎異抄）

親鸞の教えによって念仏を称えるようになった人たちは、その念仏を他の人たちに伝え新たな念仏者が生まれました。その時、問題が起きました。「私が念仏を教えたのだから、その人は私の弟子だ」「違う、違う。あなたではなく私が教えたのだから、私の弟子だ」というような弟子の取り合いが起きました。親鸞は、そのような争いは「とんでもないことだ」と歎き、「親鸞は、弟子一人も持たずそろそろ」と言ったのです。

親鸞にとって念仏は、自分のものではなく、阿弥陀さまのものでした。自分のものを授けたのなら弟子だと言えるけれど、阿弥陀さまのものを手渡しただけなのだから、弟子だと言うのはありえないという思いでした。

親鸞は、自分に伴って念仏するようになった人々を、阿弥陀さまの念仏を共にいただき共に称える仲間として敬いまし
うやま
た。

（「くり返し読みたい親鸞」ヘリベラル社「参照」）